

---

### (3) 性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員  
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科腫瘍学講座  
泌尿器科学分野  
教授 榎田 英樹

---

令和2年1月から12月における鹿児島県内16定点からの性感染症4疾患の患者報告数は、(1)性器クラミジア感染症453人、(2)性器ヘルペスウイルス感染症94人、(3)尖圭コンジローマ94人、(4)淋菌感染症194人であった。報告数の合計は835人であり、平成30年の報告数874人から39人(4.5%)減少し、令和元年の報告数853人からは18人(2.1%)減少した。疾患別の増減では、性器ヘルペスウイルス感染症、および淋菌感染症において報告数が減少しており、特に性器ヘルペスウイルス感染症は7.8%と最も大きく減少した。昨年よりも患者数が増加した疾患は尖圭コンジローマ(9.3%増)であり5年連続の増加であった。また性器クラミジア感染症(2.3%増)もわずかに増加した。

(1)性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* が原因微生物の性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎、骨盤腹膜炎などを発症する。令和2年の患者数は、令和元年の443人から10人(2.3%)増加し453人であった。月別の報告数は平成30年、令和元年と比較すると1月、2月、8月、および11月で報告数が増加していた。保健所別報告数では、始良、鹿児島市、川薩の順に多く、全体の約83%を占めた。年齢層別の比率をみると、4年連続で20~24歳(25.6%)、25~29歳、30~34歳の順に多く、これらの3年齢層で全体の約63%を占めた。また15~19歳と35~39歳で、比率が増加したが、その他の年代では横ばいあるいは僅かな減少であった。15歳~29歳の性器クラミジア感染症患者数239名は性感染症4疾患全体の約29%であり、同年代での男女比は1.2:1で男性の比率が高かった。

(2)性器ヘルペスウイルス感染症は、単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus: HSV, HSV1型又は2型)の感染により発症する。令和2年は94人が報告され、令和元年の102人から8人(7.8%)減少した。全体の男女比は1:1.5で女性の比率が高かった。月別の報告数は平成30年、令和元年と比較して1月と6月で報告数が増加し、2月、3月、11月、12月で報告数がやや減少していた。保健所別報告数では、鹿児島市が65件と最も多く、全体の69%を占めた。年齢層別には35~39歳、25~29歳(それぞれ16.0%、13.8%)の順に多くみられた。前年と比較した場合、25~39歳の比率が46%から38%へ低下した。

(3)尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス: HPV)の感染により、性器周辺に生じる有疣状腫瘍である。令和2年の患者数は94人であり、令和元年の86人より8人(9.3%)増加し、5年連続の増加であるとともに調査対象の性感染症4疾患の中で唯一増加していた。男女比は5.3:1と圧倒的に男性で多く見られた。月別の報告数は、平成30年および令和元年と比較すると7月と8月を除く10カ月で報告数が増加した。保健所別報告数では鹿児島市、始良の順に多く、併せて全体の88%を占めた。患者年齢層別では25~29歳、20~24歳、40~44歳の順に多く、20~29歳が全体の42.6%を占めた。また令和元年と比較して、20~24歳、25~29歳、および40~44歳での比率が上昇したことが特徴的であった。

(4) 淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* による性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎や骨盤腹膜炎を発症する。令和2年の淋菌感染症の患者数は194人であり、令和元年の222人から28人(12.6%)減少した。月別の報告数をみると以前みられていた夏季に限って多い傾向は認められず、10月が最も報告数が多く12月が最も少なかった。また平成30年、令和元年と比較すると2月～6月で報告数が減少していた。保健所別報告数では、始良、鹿児島市、川薩の順に多く全体の約92%を占め、特に始良からの報告は全体の68%と突出していた。年齢層別には15歳～29歳の年齢層が全体の48%を占めた。また15～19歳では前年比208%と著増していたが、他の年代では横ばいあるいは減少していた。女性患者が25人で約13%であり例年と同様に低率であった。

令和2年の性感染症発生動向の特徴は、令和元年と比較して尖圭コンジローマと性器クラミジア感染症を除いて報告数が減少したこと、性器ヘルペスウイルス感染症を除いた3疾患において20歳～29歳の比率が30歳～39歳の比率と比べて高かったこと、淋菌感染症においては前年と同様に女性の比率が12.8%と最も低かったことであった。また、全ての性感染症において15歳未満における患者発生比率がゼロであったことは好ましいといえるが、15～19歳においては性器クラミジア感染症と淋菌感染症は前年に比べて著増しているため厳重な監視が必要である。また性器クラミジア感染症と淋菌感染症で始良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

#### 鹿児島県の性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比

平成11年から令和2年の4性感染症の1定点あたり報告数の年次推移を見ると、令和2年は53.0であり、令和元年と比べほぼ横ばいであった(図1)。男女比は2.5:1と男性の比率が前年より上昇した。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ2.2:1、6.8:1であった(図2)。平成27年までは性器クラミジア感染症の男女比が等しいことが鹿児島県の特徴であったが、5年連続で男性患者数が女性患者数を上回り、男性の比率が年々上昇している。性器クラミジア感染症は女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であり、本県の性感染症の特徴として今後も動向の監視が必要である。



図1 性感染症の年次別定点当たりの報告数

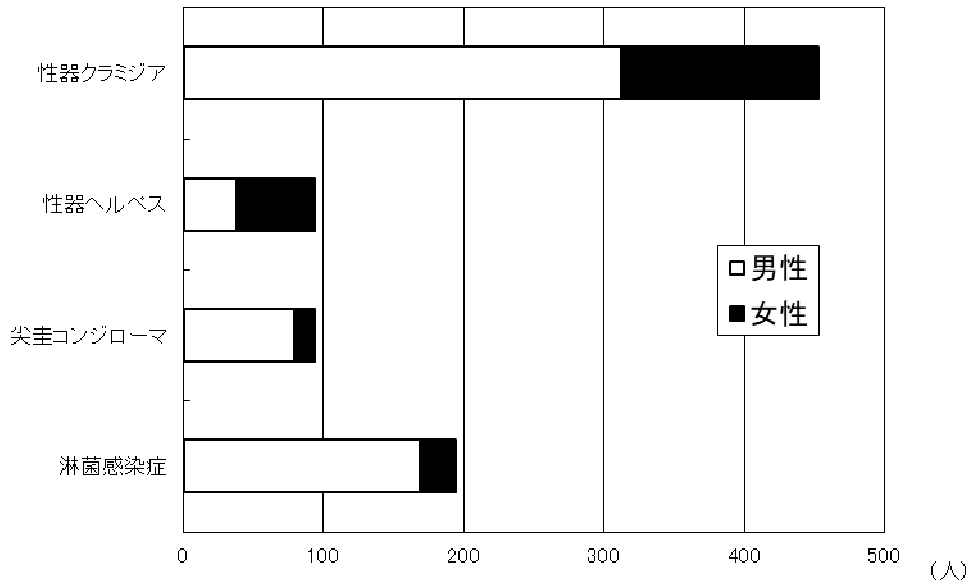


図2 令和2年の性感染症の疾患別男女別報告数(鹿児島県)

## 22)性器クラミジア感染症

(定義) *Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

令和2年の性器クラミジア感染症の報告数は453人(累積定点当たり報告数28.76)で、令和元年(443人)より10人多かった。月別報告数では、9月(43人)が最も多ったが概ね例年と同様に推移した(図2-22-1)。全国と比較すると、本県の5月(26人)を除いては、同様に推移した(図2-22-2)。年齢別では、20～24歳(25.6%)、25～29歳(19.4%)、30～34歳(18.1%)の順に多かった(図2-22-3)。

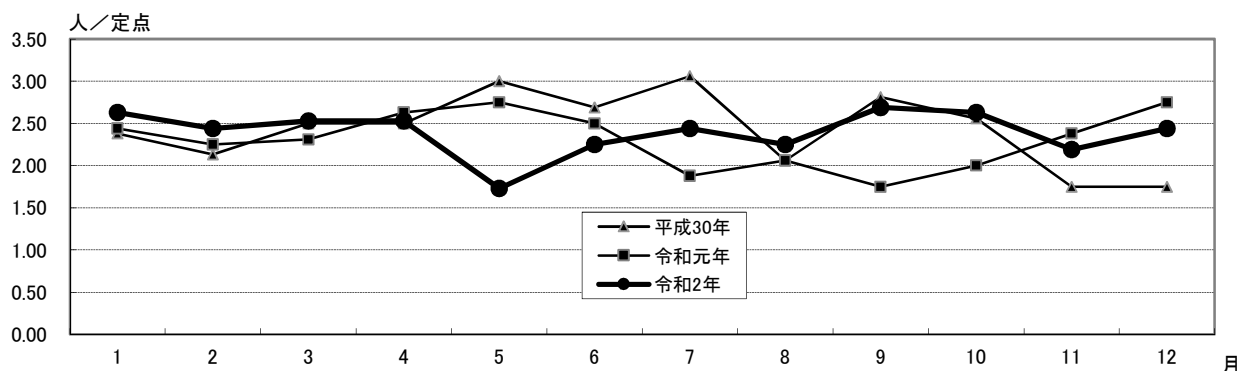


図2-22-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

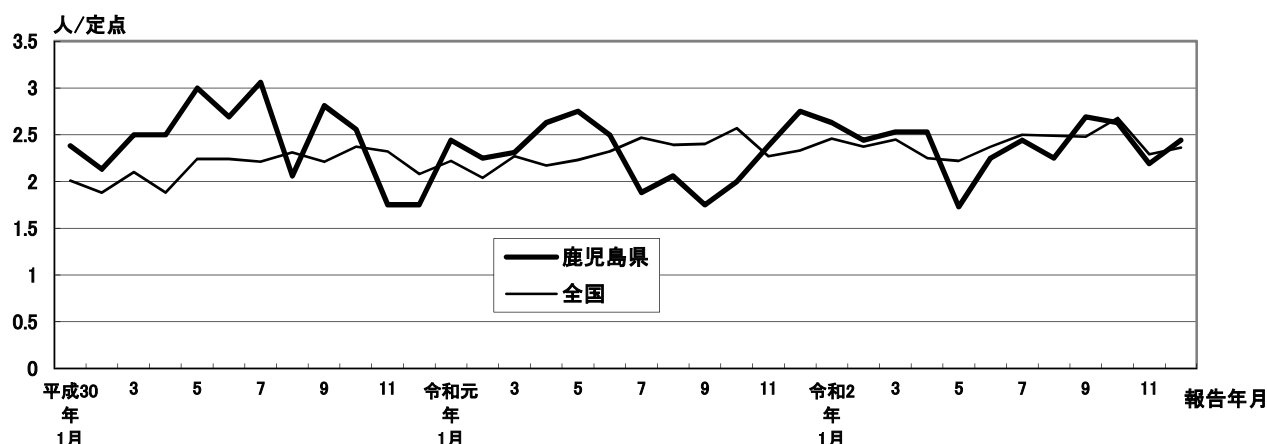


図2-22-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

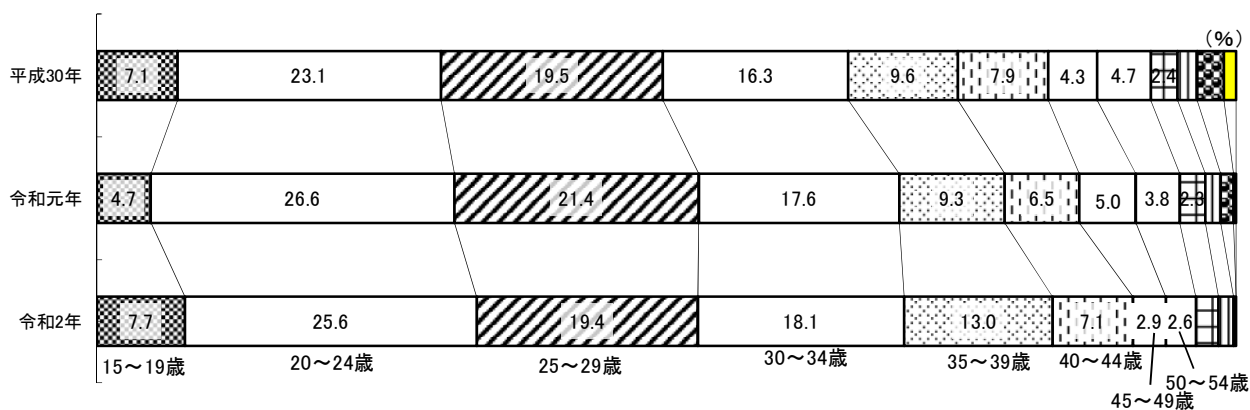


図2-22-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 23)性器ヘルペスウイルス感染症

(定義) 単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型)が感染し、性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

令和2年の性器ヘルペスウイルス感染症の報告数は94人(累積定点当たり報告数5.97)で、令和元年(102人)より8人少なかった。月別報告数では、6月(11人)が最も多かった(図2-23-1)。全国と比較すると、年間を通じて全国よりも少ない状況で推移した(図2-23-2)。年齢別では、35～39歳(16.0%)、25～29歳(13.8%)、20～24歳、40～44歳(それぞれ9.6%)、の順に多かった(図2-23-3)。

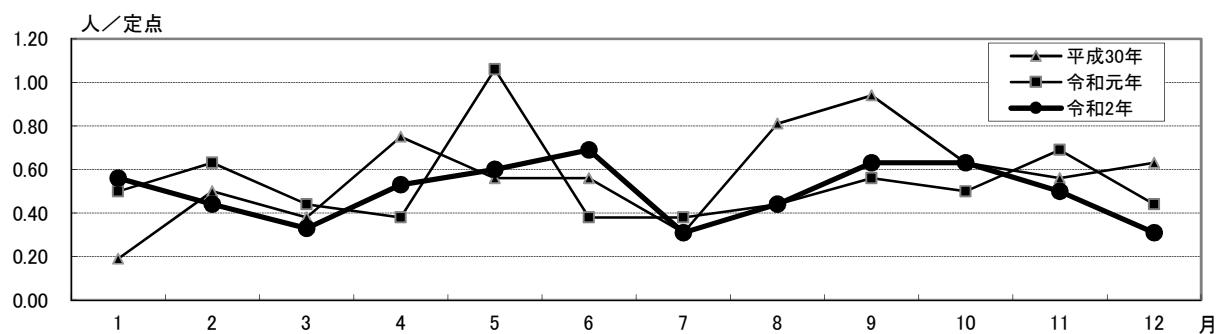


図2-23-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

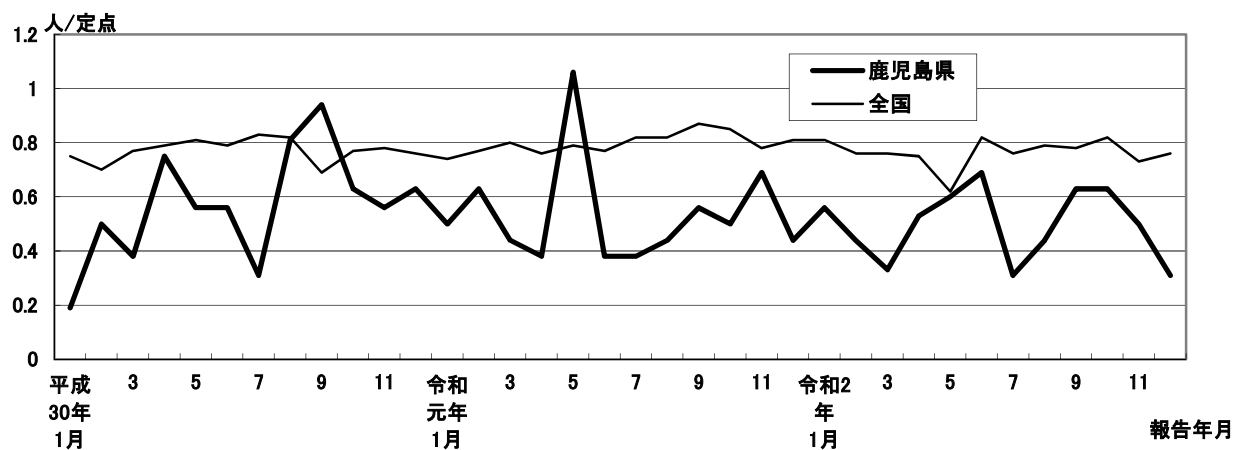


図2-23-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

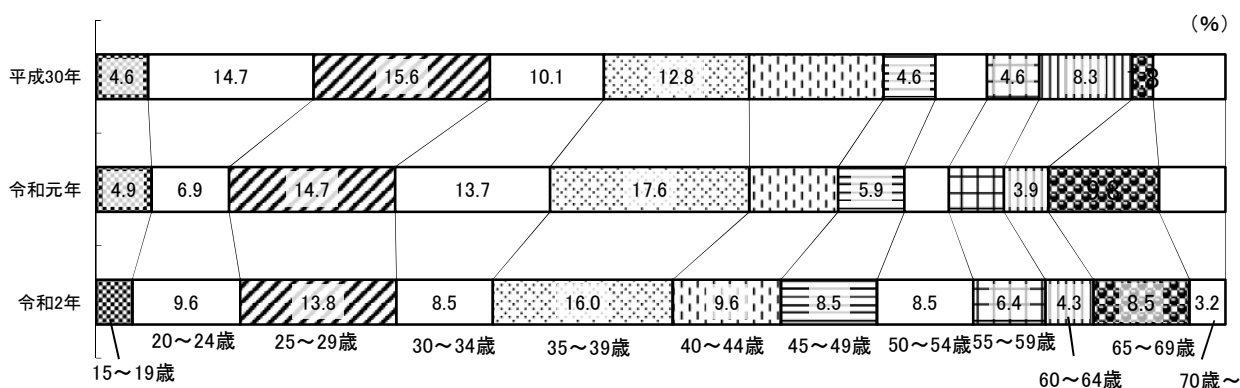


図2-23-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 24)尖圭コンジローマ

(定義) 尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス, HPV)の感染により、性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは、80種以上が知られているが、尖圭コンジローマの原因となるのは、主にHPV6型とHPV11型であり、時にHPV16型の感染でも生じる。

令和2年の尖圭コンジローマの報告数は94人(累積定点当たり報告数5.97)で、令和元年(86人)より8人多かった。月別報告数では、6月(11人)が最も多かった(図2-24-1)。全国と比較すると、7月以外は全国と同様に推移した(図2-24-2)。年齢別では、25～29歳(23.4%)、20～24歳(19.1%)、40～44歳(10.6%)の順に多かった(図2-24-3)。

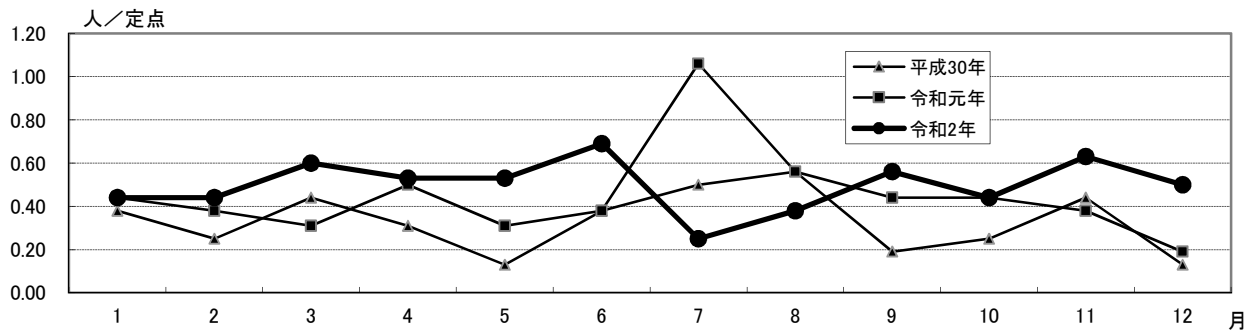


図2-24-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

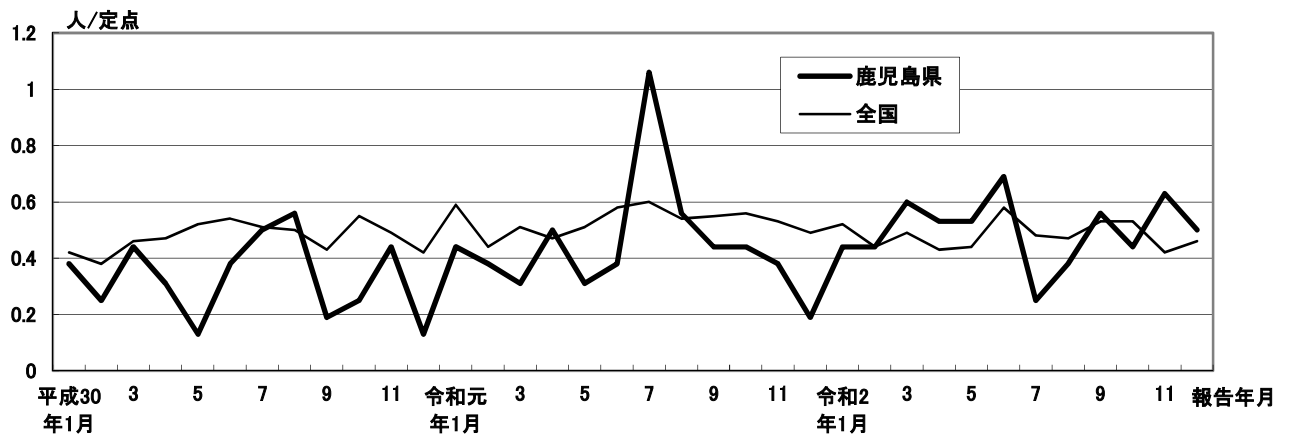


図2-24-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

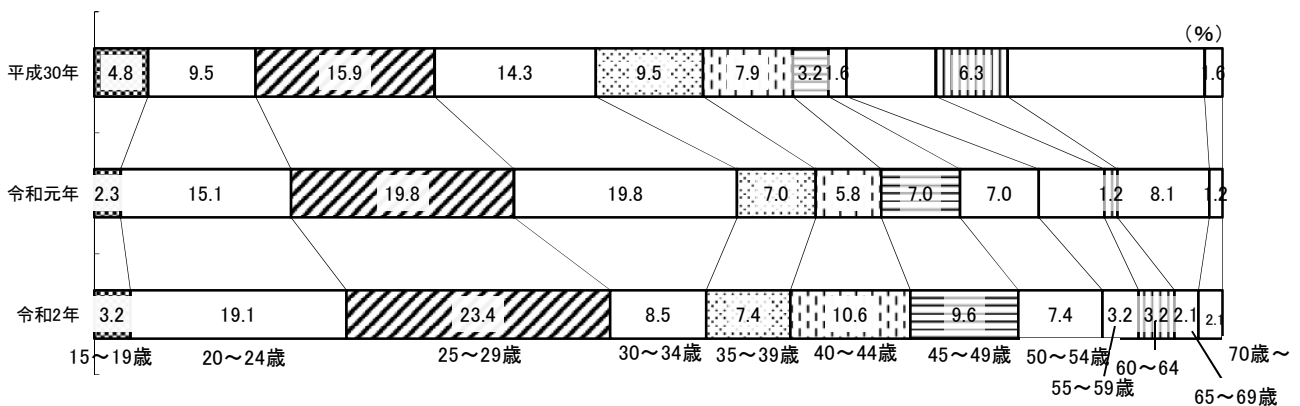


図2-24-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)タイトル

## 25) 淋菌感染症

(定義) 淋菌 (*Neisseria gonorrhoeae*) による性感染症である。

令和2年の淋菌感染症の報告数は194人(累積定点当たり報告数12.32)で、令和元年(222人)より28人少なかった。また、月別報告数では、10月(25人)が最も多く(図2-25-1)、全国と比較すると12月以外は、全国を上回った(図2-25-2)。年齢別では、20~24歳(18.6%)、30~34歳(17.0%)、25~29歳(15.5%)の順に多かった(図2-25-3)。

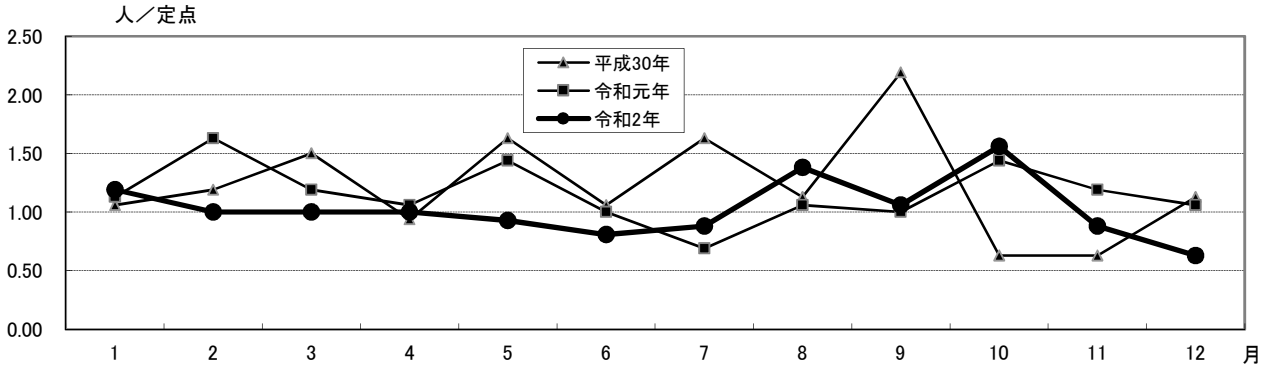


図2-25-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

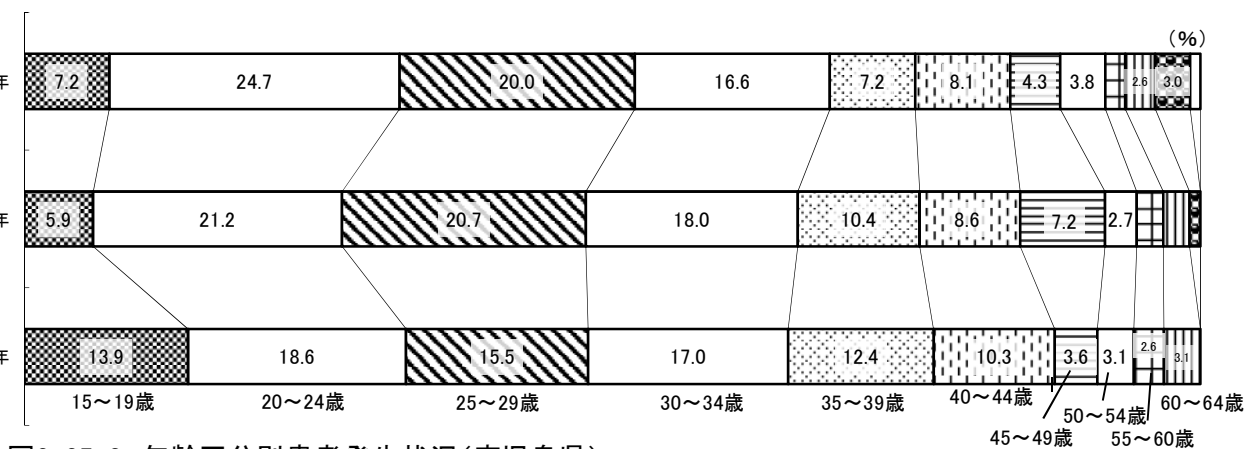
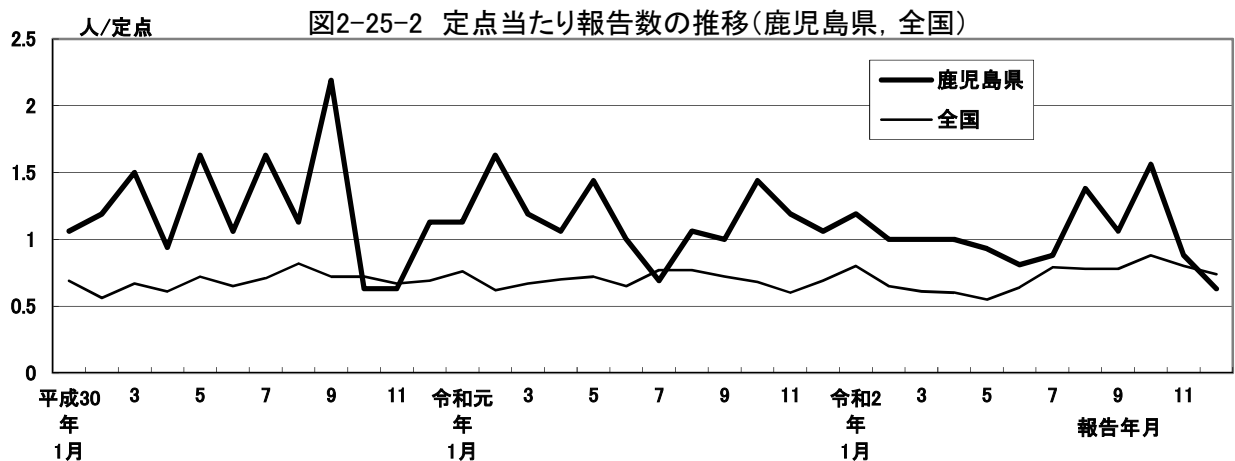


図2-25-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)